アジア・アフリカ地域研究 第 4-1 号　2004 年 7 月

フィールドワーク便り

プナンとの植物採集

小　泉　　都*

ボルネオ島にプナンという狩猟採集民がいる．いまでは稲作をしているので，正確には農耕民化した狩猟採集民といえる．またボルネオ島は豊かな植物相をもっている．この植物をプナンがどう利用しているのか，どう認識しているのかというのが私の研究テーマだ．

研究対象地の村は山間の川の岸にあり，町からはずいぶん遠いがボートだけでたどりつける．昔は奥地の山の尾根部を転々としていたというので，ある意味で研究しやすくなったといえる．もっとも伝統的な生活がみられないという点では残念なのだが．さて，この村のまわりの森で村人（インフォーマント）と植物採集をしながら植物についてあれこれ教えてもらうというのが私の研究の基本作業だ．植物を知っているというだけなら多くの村人がインフォーマントたりえるのだが，現実には教え上手な相手でないと難しい面がある．第 1 に言葉の問題．私がプナン語を少ししか話せないため，インタビューは基本的にインドネシア語で行う．でも，村人の中にはインドネシア語のあまり上手でない人もいる．かといって，あまり流暢にしゃべられるとこちらの理解がおいつかない．また単なる単語力の問題だけでなく，日本人の私にはなじみのない物や概念が話にでてくることもある．10 人ほどの人と植物採集に出かけてみたが，その中でラロさんというおじさんが教え上手だった．ラロさんは，私が教えられ

写真 1　村へカヌーで向かう様子

写真 2　ラロさん

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

たことを理解できないときにも，表現をかえたり実演してくれたりと上手に説明してくれる．そんなわけで，ラロさんとよく植物採集にでかけることになった．

植物採集に出発するときには，この前は上流のほうへ行ったから今日は下流のほうへ行くかなどというふうに適当に方面を決める．川沿いに歩いて適当に村から離れたところまでくると，森の中へはいっていく．時々，ラロさんが「これはもう採ったか？」などと植物を示す．ラロさんとだけ植物採集をしていればきっとラロさんが採った植物をほとんど覚えてくれているだろうけれど，他の人とも植物採集をしているのでそうもいかない．私の記憶は大雑把な植物のグループについてくらいで（植物分類学でいうと科や属レベル），その種を採ったかどうかまで覚えていないことがほとんどだ．「うーんこれは採ってないかもしれないから採っておこう」ということになる．花や実がついている植物があれば，私のほうから「これは何？」と訊いて採集する．そういった植物は同定にしやすいうえに，彼らが選んだわけではない植物に対してどんな答えがきけるのかにも興味があったのだ．ラロさんが「これは知らない」といったのは腐生ランだけだった．他にもいくつか名前を答えてもらえなかったものがあったが，それは地面に落ちていた花などで知らないというより分からないというべきものだった．

そんなふうにして 500 種を超える植物を採集した．ラロさん以外の村人も「この植物は知らない」ということはほとんどなかった．種レベルではっきりと覚えているかというとかなりあやしい部分もあるが，いくつかの種を含むようなグループ名を彼らが答えられなかったことはほとんどない．後で同定してみると，同じグループ名を与えられた植物はたいてい系統的に近いもので，プナンが植物自体の類似性で植物に名前をつけていることと，彼らがいい加減に答えていたのではなかったということが分かった．むしろプナン名を頼りに同定した面もある．たとえば，2 つの植物が同じグループ名を与えられていたが，1 つは A で 1 つは B という科の植物だと思って同定してみても B の科のほうの植物がうまく同定できない．念のためと，A の科の植物にあてはまるものがないかと調べてみると，これがうまく同定できてしまう．こういうことが何回かあった．花や実がある標本だとこういうことはあまりないのだが，葉だけしかない標本は，研究者にとっては決め手になる情報量が少なく同定が難しい．村人はそうではない．葉だけでも樹皮だけでもどの植物か分かってしまう．少し話が脇道にそれるが，村人は意外と花のことを知らない．重要なフルーツの花などはさすがによく知っているが，それ以外は曖昧にしか覚えていない．葉は 1 年中ついているし，幼木のときから当然ある．樹皮もいつも目にするものだ．それに比べ，花は短い期間しかつかないし上から落ちてきたものを目にするだけのことが多い．しかも花自体を何かに使うということはほとんどない．そんな理由で，花のことはあまり知らないでいるのではと推測している．

さて話を戻して，グループ名とはどうい

うものか例をあげて説明しておこう．日本人にとってもなじみのあるものでは，サクラ属の植物はプナン語でボトレイと総称されている．これがグループ名だ．この中に，ボトレイ・ムンやボトレイ・マルイといったいろいろなボトレイの種類がある．これを個別名とよんでおこう．マレー系の言語は名詞の後に形容語をもってくるので，ボトレイの後のムンやマルイがボトレイを形容している．最初に名前を訊くとたいてい「ボトレイ」のようにしか答えてくれない．こちらがふむふむとその名前をフィールドノートにつけて，しばらくするとまた「ボトレイ」が登場する．その「ボトレイ」は，前の「ボトレイ」とは違う．「これは，さっきのと同じ？」と訊くと，いやいや前のはボトレイ・ムンでこれはボトレイ・マルイだということになる．私が同じかと訊くのは，実は別物だと分かっていても村人がどう植物を見分けているかを知りたいからだ．村人が答えるグループ名が正確だと先に書いたが，個別名のほうはあやしい．この個別名の「あやしさ」，いいかえると個人個人の認識の曖昧さや個人間での知識の違いを次には研究してみたいと思っている．

ところで，誰でも同じくらい植物を知っているかというとそうではない．子供たちがまだ植物を知らないのは別として，とくに若い年代の女性が知っている植物が少ない．私が標本押しをしているのをみながら，「これは何々でしょう？」などと訊いてくるのだがこれがよく間違っている．あたらずしも遠からずということもあれば，全く見当はずれなこともある．誰でも知っている（と，あまりに

写真 3　標本乾燥につかっていたオーブン

いろんな人が教えてくれるので私が思っていた）ある薬用植物を知らない女性がいた．20 代前半だが子供も 2 人いる女性だ．村に住込みで来ている小学校の先生がツヅラフジ科の薬用植物を育てていたので，「プナンはラク・ツアックというこれに近い植物を薬に使うよ」と私は話しかけた．そこへその女性が通りかかったので確認のためにその話をすると，ラク・ツアックという名前さえ知らないという．これには少し驚いて，後でこの話を彼女の父親にした．父親はラロさんだ．私は，もしかしたら彼女は恥ずかしくて知らないと言ってしまったのではないかとも思っていた．でも，ラロさんは「彼女はまだ若いから知らなかったんだと思う．彼女も年をとれば知るようになる」と答えた．しかし，本当に知るチャンスがあるのかどうか疑問だ．村人たちは，子供があるていど大きくなる（日本でいう中学生くらい）と植物を教えだすのだという．しかし，農耕民化してしまった現

在では女性が森で過ごす時間は少ない．男性は狩りや林産物の採集でよく森にはいっているのだが，女性は村や焼畑で過ごす時間が長い．親に教わるチャンスが限られてしまったのではないだろうか．

2，30 年前には状況は異なっていたようだ．ラロさんはお父さんを早くに亡くしてお母さんから植物を教わったというし，おばあさんに植物を教わったという 30 代前半の男性もいた．この村の村長は 40 代半ばで，吹き矢などのものづくりが得意な人だ．彼と植物採集に行ったときには，奥さんが一緒だった．自分は村で生まれ育ったけれど，奥さんのほうは子供時代よく森で暮らしていたので自分より植物をよく知っているからと．奥さんも 40 代半ばくらいだが，若い女性とは違い実際よく植物を知っていた．ところでこの日は植物採集の途中でイノシシが獲れた．たいていのインフォーマントは，植物採集のついでに狩りや林産物採集を行う．こちらにとっても実際の暮らしをみるいい機会だ．歩いていて，目的にちょうどいいものがみつかるとササッと採集してしまう．この日獲れたイノシシは，すぐに切り分けて籠に詰めて奥さんが背負った．こぶりのイノシシではあったが，私なら持ち上げるだけでやっとの重さだ．それを小柄な奥さんが担いで裸足ですたすた歩いていくのには植物のこと以上に感心した．また彼女は木登りも上手だった．本当はそれほど年寄りではないけれど，見た目は今の日本なら 70 歳といってもとおりそうなくらいだ．「おばあさん」が枝のない幹を手と足だけでスルスル登る姿は新鮮だった．

一般的な傾向として，狩猟採集民は生物名語彙を農耕民に比べて発達させていないといわれている．また逆に，狩猟採集民を直接に知らない人は，狩猟採集民というと怪しげな呪術を使う人々というようなイメージをもっていることもある．私の調査しているプナンの場合そのどちらでもなかった．植物によく名前をつけているしそれぞれの植物についてよく知っている，とはいえ呪術的に植物を使うことはほとんどない．一般論や先入観に対

写真 4　現在の主食のコメを脱穀する女性たち

写真 5 サゴとイノシシの皮と血でつくった伝統食

して自分でデータをとって確かめていく，あるいは覆していく，フィールドワークの醍醐味の１つだと思う．さて次の課題は，こうして現実をとらえた後でもっと踏み込みたいことをみつけ，そのためにはどうやって研究すればいいのか考えて次へ進んでいくことだ．私にも次に知りたいことがいろいろある．自分で考えて自分で実行するフィールドワーク，楽しいですよ．

Challenges of War Time Education; Fieldwork Report from Gadien Village in Eritrea

Daniel Baheta*

Introduction

I would like to give an overview of my current field research area in Eritrea and share impressions from diary during my fieldwork last year. From 2001 until 2004, I have been conducting research in Eritrea. My research has focused on assessing the impact of formal education on the livelihood of rural people in general and girls in particular during the war between Ethiopia and Eritrea. First, I will give a brief overview of the field area. Second, I will simply share my diary to show the response of my informants to the current education phenomena in Eritrea.

At the time of independence in 1991, Eritrea inherited an economy in shambles, a social infrastructure rendered decrepit by war, a shortage of skilled and professional workers and a host of other social problems. The formal education system was feeble, distorted and insufficient to reach the population at large. In the past thirteen years the government has initiated radical policies to allow access to education in all parts of the country. The fundamental aim of the government of Eritrea is to make basic education up to grade eight compulsory and develop a curriculum that reflects the reality of Eritrean society and history. Furthermore, the government seeks to use education as a means to implant a nationalist sentiment and a desire to both develop and defend Eritrea.

The formal Eritrean education system is as follows; primary school is from grades 1-5, junior high school is from grades 6-8, and senior high school is from grades 9-12 followed by six-month mandatory military service. Those students who pass to

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

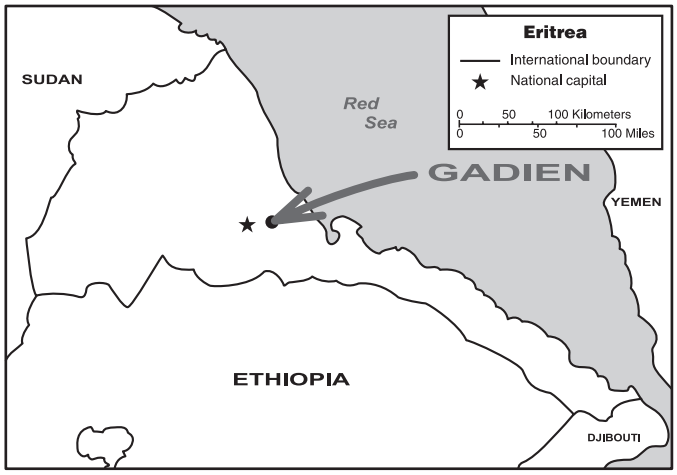

Fig. 1. Study area. Gadien is located at the central part of Eritrea.

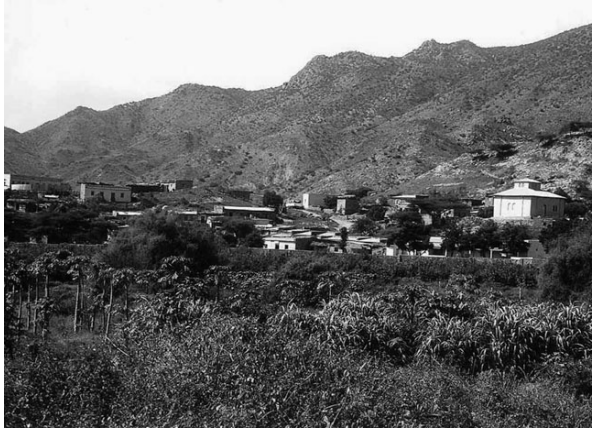

Photo 1. Overview of Gadien village. Fruits farm is neighboring to the village center.

university, college and technical schools will continue with their education, the rest will serve in the national service for two years.

Research Area

Gadien is located at an altitude of 2,100 m above sea level in the barren mountainous terrain of Eritrea. The capital city Asmara lies 62 km to the Southwest, and while the port town of Massawa is located 125 km to the Southeast. The emergence of Gadien as a settlement area is attributed to the construction of a second road linking the port town of Massawa to Asmara in the 1900's.

Eritrea is a predominantly agrarian society with 80% of its people living in rural areas. However, the great majority of people in Eritrea struggle to produce just enough food

for sustenance. The introduction of irrigation farming by Italian colonizers forced farmers to migrate from the areas around Gadien, to come to the village to work as laborers.

The population of Gadien is 1,123 with a nearly equal distribution of males and females. Of this total population, 425 or 37.8% are under the age of 18. Of the 210 households in Gadien village, 74 are Muslim and 136 are Orthodox Christian. About 80% of the people in Gadien are farmers who depend on agriculture for their livelihood. However, the overwhelming majorities do not own land but work as laborers on the fruit crop farms or practice pastoral way of life. An Italian named Galio opened the first crop farm. The introduction of water pump irrigation for effective farming was incentive for many people to migrate to Gadien.

Today the main agricultural activity in Gadien is the production of fruit crops for sale. The main fruits include oranges, papaya, guava and lemons. About 60% of this fruit cropland is owned by a Catholic organization called Enda Padre. Galio sold his property to this church organization and after independence they were able to reclaim the land. People who come from the neighboring towns and villages to work in Gadien own the rest of the crop farmland.

Since independence, Eritrea's new government has focused on the rebuilding of nation starting from ground zero. Eritrea still suffers from the effects of the long and costly war with its former colonizer and from continued border conflicts with its new neighbor Ethiopia that started in 1998. The damage to its education sector cannot be easily measured. Over 85% of Eritrean youth aged 18 to 35 are conscripted into military service. Over 80% of male teachers have been teaching for meager salary. This is because they have been called on to serve their nation, and over 90% of their salary goes to the defense forces.

In the next section, I will present parts of my diary from field notebook showing my unadorned impression just after arrival in Gadien village and my record of conversations with informants. My aim is to show how people in Eritrea are coping with the war in conjunction with shortage of water and food by creating innovative ways.

Changes in Gadien; April 7, 2003

I have just arrived in Gadien village to start my 4th fieldwork. I went to see the school and talked to the teachers and principal of Gadien primary school. Right from the start, I observed some changes in my students' faces and appearances. The first noticeable change was the fact that all the students were wearing new school uniforms. In Eritrea all students from primary up to senior high school students must wear uniform. However, until this year the obligatory policy was not

enforced in Gadien. This must have added extra cost to the parents' already stressed household economy. The second change was the fact that all the teachers and the principal of Gadien primary school have been changed. The changes that took place were introduced as national policy this year in order to rotate teachers working in remote areas to have a chance to work in big cities.

This new change was both good and bad for my research. It is good, because it allowed me to get afresh and anew perspectives about the village and the teachers. I spoke with the new principal about Gadien and his students. I also asked him about the shortage of food and water in the area and how it is impacting on the process of learning in the classroom.

The principal, Mr. Eyob, answered my question by giving me the general feeling about the community. Starting with the lack of labor force, fathers being at the trenches and serving in the front line, mothers earning the minimum amount by working in the fruit farms, the kids were the first to suffer. Mr. Eyob was surprised at the people's ability to endure such difficult conditions and how the communities were moving forward. He said, "People at war are always zealous." He said that 300 students were registered this school year, and of these 5 students have dropped out. One was married; 3 were dreadfully sick and the last one simply quitted school. The rest were here he added.

In grade 5 almost half of the students were involved in paid labor every day. They come to school in the morning and in the afternoon they must work for the private farm owners. According to the principal of the school, the youth working during the afternoon seemed to do well academically and in their daily activities. They were more responsible and matured students. Mr. Eyob also talked about how parents were getting financially stressed due to the fact that many of them were paying more for transportation to send their children to junior and senior high school a large city 20 km away from Gadien.

Today in Gadien, the hard social reality and the poverty level of the villagers are broadening. For example, most, if not the majority, of the children are growing up within single mother households. This is due to the fact that, some fathers have not been back since the war begun in 1998, meaning that they are missing in action. This social reality is negatively affecting the learning process. Mr. Eyob also stressed that even those fathers living at home are suffering from the economic reality of the current state of the nation. Most of the men working as day laborers are making only about 30 Nakfa ($3) a day.

4 out of the 6 teachers are also doing military service and they only make 500 Nakfa per a month. As mentioned above, almost everyone between the ages of 18-40

is currently serving in the military. This is also another extremely difficult social reality. If the teachers are not eating, feeding their family and content with their life, their ability to teach will dramatically suffer. Mr. Eyob explains that education needs a place and time where parents, students and teachers have the necessary ingredients to conduct the teaching and the learning process in a more conducive environment.

I also talked to some villagers about the education system and how it is affecting their daily life. I asked Mrs. Tsegewine how the current situation, especially the question of water, is impacting daily life. In the last two years, rain shortage has caused very severe social conditions for farmers. Mrs. Tsegewine said,

> *"We are suffering greatly. We did not harvest last year. We did not even get enough water to drink, never mind nourishing the land. God is punishing us. We are hoping this year will be different. Our children cannot go to junior or senior high school due to the lack of funds. We have no money. Even those rich farmers are not hiring many people, or if they do the payment is almost nothing. We are truly suffering. Of course we get aid, but that is not enough either or if we do not get water what can we eat?"*

Mrs. Lemelem was very clear and expressive in her view. She explained her worries about her daughter's refusal to get married. "My daughter wants to further her education and go beyond high school." Mrs. Lemelem could not understand why she would want to stay in school. She started by explaining the cost of transportation and other related expenses. Moreover, three or four times men have come to ask for the parents' approval to marry their daughter. But, it has not been possible. The problem as the mother explains is very clear.

> *"The men who have come to marry her are in military service, they cannot afford to feed or provide for her. They only want to have children. I can understand that, but how long can we live like this? Yes, my sons also have the same dilemma. We also want them to find wives but we have nothing to offer the brides. We are being supported by aid money to survive."*

The community at large is asking similar questions.

Water Pipe Project; April 12, 2003

Today, almost all of the parents of Gadien elementary school came to work on a water pipe project. Since the lack of water in Gadien is creating a major crisis in the

whole community, the people are planning on their own initiative to create a water reserve so that the students can drink while they are at school. First, the school director invited the parents to a meeting and brought the idea before them. Then all the parents raised about 1,500 Nakfa ($150) to put in the pipelines. But, since the money was not enough, so I donated to them 1,000 Nakfa, then they bought the needed extra pipes and were able to call all the community to install the pipeline. In all about 90 people, both men and women participated in digging, burying and cementing on the pipeline.

After they finished working, I interviewed two parents from Gadien elementary school about the current situation. I asked Mr. Jaber first to give me a general sense of the problem. He explained the lack of water in the community.

"In the last rainy season we did not get nearly enough water even for drinking. Because of that we did not get anything from the land. We did not harvest. The fruit farm had not produced anything so even those employed, as day laborers could get no money. This had major implications. We have become aid dependent. But even the aid we get is not sufficient, we are getting about 10 km per month. Without water we cannot even use the aid we get. Water has become our petroleum. People who own farms have water pumps, but they cannot keep on giving while their water from underground is drying out. I think this year probably things will change. This coming rainy season, God will help us."

Mrs. Meherate also explained her share of the current shortage of water. She explained about the need for learning and building water reserves or some sort of irrigation. "We get enough water running at least two times a year but we do not know how to keep it in reserve so in times like this we can use it." She explained about the women struggle in the community in digging water wells. "We are in need of people to help us with digging water wells, to get the water we need to dig deeper into the ground, but we have a shortage of people." Even though people who own the motors for water pipes are sharing them with the general public, the well is drying up.

Dekemahare Senior High School; April 17, 2003

Today, I went to visit Dekemahare Senior High School. Dekemahare is 20 km away from Gadien. Students from Gadien must take the local bus to attend junior and senior high school. It is the only high school in the area. It has about 4,780 students, 47 teachers of whom 15 are foreign Indian

teachers. All the students wear a uniform. The overwhelming majority of the students come from the neighboring villages and small towns. And so the situation is very complex. I asked the vice director Mr. Haile Walde Yohanes about the difference between students coming from Dekemahare city and those from the surrounding villages including Gadien. Mr. Haile explained, " the students from the Gadien area were very good natured, disciplined, and matured. They have a very shy attitude towards the teachers and to the school rules and policies." He also added that students from the Gadien area seemed to have more money and resources, as well as independent minds.

Generally, students coming from rural areas do not create any problems for the teachers nor to the other students. However, they have a poor sense of time and they do not respect time. They come very late and they tend to miss classes whenever they want. This may be due to the fact over 95% of the students work both at home and in fruits farms as workers. This causes stress in their school activities. They have very low ability to communicate with instructional media in the classroom. English is a very new and under-practiced language in their lives. So, it appears that they do not participate or speak in the classrooms. Their academic achievement is very limited and not significant. Mr. Haile said, "It seems to me that they come to school just to avoid going to the military service. They are not interested in learning or using education as a tool to improve their lives." In the last 4 years I have witnessed an incredible increase in the numbers of students from villages finishing high school. This is because many of the villagers are using the school as a shield to avoid going to the military service early.

The dropout rate is not very significant. From the village areas most boys tend to finish school. Nevertheless, only less than 1% will continue to higher education institutions such as university or colleges. Most of the girls get married in grade 9 or 10. Almost none of the girls go on to obtain higher education pass to high school. However in the last 2 years, we have seen some girls from the village areas pursuing school with great interest. Some are refusing to get married early and intend to go ahead with their education.

The last 4 years education has become very irrelevant. Over 75% of the total student body, have repeated at least 1 year of school. This is also a mechanism to delay military service and stay at home. Only 5% of the total student population will pass the general entrance examination in grade 11. The rest will continue in the military service and most students consider education to be irrelevant. This has really impacted on the teaching and learning process in most places in Eritrea.

Most students are here for a student ID, so the police will not stop them. If you are not a registered student, you have to join the military and that is the main reason most of the students come to school.

Finally, I asked Mr. Haile about the relevancy of education in general for students in his school. He explained that

> *"Education must have at least three principal purposes. First, it has to play a major role in giving students knowledge about the universe and about common sense. Second, it has to provide tools to solve problems. Furthermore, it has to give students common language to communicate as well as sense of security for the future."*

However, in Eritrea education system today does not provide these three most fundamental issues, i.e., knowledge, common language and security. Furthermore, according to my observation during my fieldwork in Eritrea, I have observed that wartime education is having negative impact on the livelihood people in Gadien village.

トマトの違い

── ケニアのマチャコス公設マーケットで野菜小売商から学んだこと ──

坂　井　紀公子*

ここはケニアの地方都市マチャコスにある公設マーケットです（写真 1）．私はこのマーケットに通いながら，商売に関するさまざまな知識を商人たちから教わっています．ここでは生産者，卸売商，小売商といった 1,600 人あまりの売り手たちにより，約 140 種類の農産物が販売されています．そのなかでもひと際目立つ商品といえば，トマトです．なぜなら，売り手がもっとも多く，マーケットのいたるところに陳列されているからです．たとえば，卸売が行われているスペースの半分をトマトが占めており，そこで繰り広げられる青い空と真っ赤なトマトとの鮮やかな色の競演はみごとです．

トマトを扱う売り手が多いわけは，マチャコスで一般的な料理を見るとわかります．まず，スープは完熟したトマトをベースに味付けされ，ほどよく熟れて身の固いトマトはサラダの主役です．そして，主食のイシオ（メイズと豆の煮込み）もトマトで味をととのえ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　トマトを卸す商人たち

写真 2　早朝 6 時のマーケット

ます．このようにトマトは，料理に欠かせない食材です．しかも腐りやすい生鮮野菜であるため，日々こまめに購入される食材でもあります．要するに，トマトは安定した需要のある商品なのです．売り手はこの特徴に目をつけ，日々確実に利益を得る手段としてトマトを扱います．というわけで，マーケットにはトマトの売り手が溢れているのです．

しかし，トマトが氾濫するマーケットで，売り手はどうやって自分のトマトを買い手に売り込むのでしょうか．そして，買い手はどのようにトマトを選んでいるのでしょうか．そんな素朴な疑問をもっていた私に，ある日，小売商のドゥコおばちゃんを手伝う機会が訪れました．以下では，そのときかいま見たトマトの違いについて考えたいと思います．

早朝 6 時のマーケットは，トマトを売る生産者や卸売商とそれを買う小売商とでいっぱいになり，活気づいています（写真　2）．私はドゥコおばちゃんの後ろにくっついてトマトを仕入れることになりました．トマトの大きさは等級で区分されており，相場の高い順に「A 級（箱の中身が大粒ばかり）」「B 級（中粒ばかり）」「Mix（大粒と中粒の混合）」「級なし（小粒もしくは大きさが不ぞろい）」となっています．熟れ具合の違いにも区分があり，相場の高い順に「青赤混合（熟れかけと熟れたもの）」「青い（熟れかけ）」「真っ赤（完熟）」に分かれます．つまり，このふたつの基準の組合せにより，トマトが　4×3＝12 の違いに区分されることになります．もっとも高値になる「A 級」で「青赤混合」のトマトの相場は，この日，木箱あたり　1,300　シリング（1 ケニアシリング≒1.4 円）でした．買い手たちは，等級と熟れ具合を吟味しながら売り手と値段の交渉を繰り返します．ドゥコおばちゃんが 2 時間かけて仕入れたものは「級なし」の「真っ赤」なトマトで，1 箱 950 シリングになりました．等級と熟れ具合の区分から判断すると，これは最安値にあたるトマトです．

ドゥコおばちゃんは「級なし」で「真っ赤」なトマトをよく仕入れます．同じよう

に，その向かいで営業する小売商は「A 級」で「青赤混合」のトマトをよく仕入れています．仕入段階で小売商たちは，自分が売るトマトと周囲の小売商が売るトマトとの間に，等級と熟れ具合の違いをおおざっぱにもつようです．

さぁ，一息つく暇もなく，トマトを売り場に並べて商売をはじめなければなりません．ほかの小売商たちはすでに商品を並べはじめています．私たちも急いで準備に取りかかろうとしたとき，ドゥコおばちゃんが私に向かっていいました．

「ムンブ（私のあだ名），今日はあんたにトマトをまかせるよ．トマトを積んでごらん」

小売商たちは，いくつかのトマトを積んで小さな山をつくり，それを単位に販売します（写真 3）．私はまず 10 個のトマトを手にとって，山をつくってみました．あれまぁ．いつも見慣れているトマトの山ができません．焦って積むと崩れてきます．完成しても山はガタガタなピラミッドになっています．その様子を見たおばちゃんは，山を崩してトマトを積み直します．

「ムンブ，見ておきなさい．これじゃ山がすぐに崩れてしまうよ．それに今日のトマトは小粒だから，20 シリングで売る山は 16 個のトマトを使うこと．それも大きめのトマトを積む．まず，1 段目に形がそろったものを置く．2 段目には 1 段目よりも大きめのトマトを積む．最上段には特に大きくて形のいいものを載せてできあがり．それから，10 シリングの山は大きめのトマトばかりだと 8 個，小さめのトマトばかりだと 10 個を使う．

写真 3　野菜を小売りするドゥコおばちゃん

5 シリングで売る山は特に小さなトマトを 5 個使うように，そらやってごらん」

大きさと形をそろえることで，確かに安定感のある山ができあがっています．それに，向かいでは「A 級」のトマトが 7 個で 20 シリングの山として，3 個で 10 シリングの山として並べられていたので，それらと私たちの山との間には，嵩の違いができています．

しばらくして私が売り場の最前列に 4 つの山をつくり終えたとき，ドゥコおばちゃんはジャガイモを並べていた手を止めて，おもむろにいいました．

「ムンブ，買い手が見る方向からその山を見てごらん．買いたいと思うかい？真っ赤で形もいいトマトを多く入れた山を最前列に並べること．不恰好なものは山の一番下の段に入れて，見えないようにその上からトマトを積む．腐りかけのトマトは入れないこと．それはおまけで客にあげるか今日の夕飯に使うから，後ろに置く．次に青いトマトばかりの山もつくっておくこと．まとめ買いをする客の場合，青いトマトを欲しがるからね」

山を積みはじめてから 1 時間が経過したと

き，ようやく 20 個の山をつくり終えました．ふと顔を上げると，周囲の小売商たちはとっくに並べ終わって店開き．屈んだ姿勢でトマトを積んだために痛くなった腰をもみほぐしていると，向かいの小売商がニヤニヤしながら「なかなかいい積み具合じゃないか」と，奮闘していた私をねぎらってくれました．

小売商たちは，山ごとに熟れ具合を統一させ，形のいいものが買い手側から見えるようにトマトを積んで山をつくります（写真 4）．このように，陳列段階で小売商たちは，ひと山の嵩の違いやトマトの色形の良さでお互いの山を差別化し，売り込み合戦をしているようです．それと同時に，自分の山のなかで熟れ具合の違いをより細かく設けて山の多様化も図っています．この時点ですでに売り場には，早朝にみられた 12 区分をはるかに上回る「トマトの違い」が現れてきました．

さて，チャイ（砂糖がたっぷり入ったミルクティ）を飲みながら一息ついていたところに，最初の客が来ました．

写真 4　大きさと熟れ具合ごとにトマトの山をつくって売る小売商たち

「あんたがトマトを売っているのかい？」と，おじさんが素通りしようとした足を止めて驚いたように聞きます．

「そうです．どの山にしましょうか」

私はこの一見客にトマトを買ってもらおうと愛想よく応対します．その間ドゥコおばちゃんは久しぶりに訪ねてきた姉と 2 人でおしゃべりを続けています．

「名前は？どこから来たの？」と，おじさんは私に質問するだけで，トマトを買う様子はありません．

「何を探してるんだい．この子はトマトじゃないよ，早くトマトを選んでおくれっ！」

突然ドゥコおばちゃんは貫禄のある声で冗談交じりに文句をいい，おじさんを圧倒します．そしておばちゃんは，おじさんが顎でかすかに指した方向にある 20 シリングの山をビニール袋へ詰めだしました．なんと，その山の下段には，売り物にはならないはずの腐りかけたトマトが混ざっていました．しかもトマトを詰めるときに隣の山へ紛れ込んだトマトをそのまま放置し，おまけのトマトさえ入れずに袋の口を閉じたのです．その動作の素早さはみごとなものでした．物珍しい外国人と話したいおじさんは，それに気づきません．この勝負，一見の客を引き込んだ私と袋詰めの技がベテランの域に達したおばちゃんとの連携プレーで，完勝です．

お昼どきになると，マーケット内にある簡易食堂の店員たちが，熟れたトマトを探してマーケットを徘徊します．こうした食堂では，普通は調理済みの料理を客に出します

が，時々メニューにない注文も受け，店員はその都度トマトを必要な分量だけ小売商から買うのです．キョロキョロしながら歩いていた店員が私たちの前で止まりました．

「これ，よく熟れているね．この山をひとつ詰めてよ．あっ！1番下の段の2つは腐っているんじゃないの？その2つは入れないでよ．代わりに後ろの山から2つ入れておいて．おまけが2つなんて少ないよ，このトマトもおまけでもらっておくよ」

店員はうるさい注文をつけます．私はこの客の言いなりになり，大きく形のいいトマトばかりを袋に詰め，おまけも多く入れてしまったために，20 シリングで売れるような山を 10 シリングで売るはめになりました．

「そんなことじゃ，商売あがったりだよ」

ドゥコおばちゃんは私をたしなめます．けれども立て続けにこのような一見の客が来ては，おばちゃんのいう商売あがったりな買い方をしていきます．経験の浅い売り手には，買い手の我がままをかわすことはとても難しい．私は，それをうまく利用する抜け目のない買い手たちの餌食になっています．

夕方 5 時頃からは，人々が夕飯の材料を買いにやってくる時間帯です．小さな男の子がひとり私の前に立ちました．ドゥコおばちゃんは心得たように，残っているなかでもよく熟れたトマトばかりの山を選んで，私にビニール袋へ詰めさせました．さらにおばちゃん自らがおまけを 3 つも足して，男の子へ袋を渡します．すると男の子は，パッと開いた手のひらを私に差し出しました．そこには 5 シリング硬貨 1 枚がのっていました．

「お母さんは元気かい？ほら，袋をちゃんと抱きかかえて持ちなさい．落とさないようにするんだよ」と，男の子の世話をやいているおばちゃんの横で，私はつぶやきました．

「おばちゃん，それ商売あがったりやでぇ」

トマトの良し悪しがわからない子供は，売り手にとって騙し易い客になります．しかしおばちゃんは，男の子の代わりにトマトを選び，しかも多くのおまけをあげました．この子のお母さんはドゥコおばちゃんの常連客であり，知り合いだそうです．この勝負は，ドゥコおばちゃんのところに男の子をお使いに行かせたお母さんの作戦勝ちといえます．

午後 7 時にようやく 1 日の仕事が終わり，95 個の山が売れて，トマトの売上げは総額 810 シリング（純利益は 310 シリング）になりました．木箱いっぱいに詰まっていたトマトが半分近くまで減っていました．今日はよく売れたといって，おばちゃんは満足そうです．

振り返ってみると，売り手が誰で買い手は誰なのかという違いや，売り手の経験の違いが，最終的に売買されるトマトの量と質に変化をもたらしました．こうして増えていく「トマトの違い」を目の当たりにし，それ以前に抱いていた素朴な疑問を少し解消することができました．トマトが氾濫するマーケットで，自分のトマトを買い手に売り込むために，売り手は仕入・陳列・販売の各段階で徐々にそしてより微細な違いをトマトにもたせます．そして買い手はトマトを選ぶとき，トマトの見た目の違いとともに，売り手の違いにも注目します．

この日を境に，どのトマトも同じようにしか映っていなかった私の目に，「トマトの違い」が見えてきました．青い空の下にあるのは，単に赤いトマトの山々ではありません．大きさ・色・量・質が違い，しかも売買の最中にその内容がさらに変化しうる，色とりどりで唯一無二のトマトの山々です．売り手は知恵を絞りながらさまざまな「トマトの違い」を用意し，移り気な買い手とその内容をめぐって勝負する．この売り手の緊張感と奮闘ぶりがわかった今，無邪気にマーケットの風景を楽しめなくなった私でした．たかがトマト，されどトマト．トマトは私にマーケットでの商売の奥深さをチラリと見せてくれたようです．